＊「地域医療・介護新地域支援法」が成立して

「生活支援コーディネーター」の役割

堀田力　さわやか福祉財団会長に聞く

二〇一四年七月二二日
神宮前事務所にて

聞き手
尾崎美千生　元毎日新聞政治部副部長
堀内正範　朝日新聞社社友
岡本憲之　ＮＰＯ・ＪＴＴＡ理事長

「世界会議」の発起人に「ノー」とはいえない

尾崎：きょう堀田先生をお訪ねした目的はふたつありまして、ひとつはいま進めておられる「新地域支援事業」のお話と、もうひとつは今から八年後の二〇二二年に「世界高齢化会議」を日本に招致して開きたいということで準備をはじめたところですが、その賛同者に堀田先生に加わっていただけるとありがたいと思います。

堀内：二〇二〇年の「東京オリンピック」招致がきまって、国際的な関心を引き寄せながら実施にむかうのでしょうが、同時に世紀の潮流である「高齢化」も、国際的な立場からいって、同時進行しなければならないのではないか、ということで。
堀田：ほう。
尾崎：賛同者の代表には明石さんにということで、先日（五月二六日）、お話しにいったのですが、「それまで生きていないよ」とおっしゃりながら関心はおありのようで、最終的には納得していただけるのではないか、という気がしているのですが。それにぜひ堀田先生に加わっていただけるとありがたいのですけれど・・。
堀田：そうですか。まあ、「世界会議」のほうの発起人ですか、その時には死んでいても今はやるということはできるでしょうから、声をかけられてノーはいえませんね。
尾崎：ぜひお願いいたします。
堀田：二〇二二年というのは世界三回目ですよね。
尾崎：そうです。
堀田：もうちょっと日本の高齢者が社会貢献活動をしていないと、恥ずかしくてやれないですよね。
尾崎：そのために三段階が必要なのではないかと考えていまして、まず日本国内で地方と都市の問題をやろう。首都圏を中心にやって、それからアジア会議に拡大して、急速な高齢化の問

題。最終的に国際的な高齢化トップランナーである日本の果たす役割として、世界会議にもっていこうということなのですが。
堀田：場所が動くのではなくて、場所は日本でやるということで、集めるレベルをそういう段階にして。
岡本：国内、アジア、世界と三ステップで世界にもっていきたい。最初のふたつは国連の会議とは限らないで。最後は政府間会議ですから国連と日本国政府が腰をあげないかぎり実現はできないのですけれど。
堀田：それはいいと思います。国内でやるのなら恥ずかしくないですよね、お互いにぶらぶらしているもの同士ですから、もうちょっとしっかりやりましょうということで。しかしアジアを対象でやることになると、アジアの高齢者はよく働いていますからね。社会貢献もしていますから、いまの日本では恥ずかしい思いをする。「恥ずかしいから世界にむかってはやれないよ、アジアをやったところでやめよう」ということになるかもしれない。
堀内：いまのわが国の高齢者は、先駆けて得ている長寿を意識して、それにふさわしい新たな社会をつくることに務めているとはいえない。
堀田：それを目指すなら、「もう一息、みんなで頑張って社会貢献しましょうよ」ということにならないと。
堀内：呼びかけるに当たって、みんなで務めて「高齢社会」の形成にむかっている。それが前

提ですね。
堀田：日本のお年寄りが動き出したらそこそこ世界でやれる。そこまで持っていけるかどうか。
尾崎：それが世界会議を招致する意味なのですが。

前回「マドリード会議」で急遽開いた分科会

岡本：前回の二〇〇二年マドリード会議の時の日本政府からの出しものといえるのは、二〇〇一年に改正されていた「高齢社会対策大綱」、それが唯一のという程度で。
尾崎：先生はNGOの関係でいかれたのでしたね。
堀田：そうです。われわれはNGOとして行きましたけれど、政府参加としては恥ずかしいものでしたね。政府の方の会議はそれとしてあって、恥ずかしいことに日本は大臣も出ていない。われわれは政府とは関わらないでいましたよ。NGOはしっかりやろうということで。行ってみたら四〇〇〇人あまり来ていました。一日に何十という小さな分科会が午前と午後と三日間開かれて、何百という分科会が各国から来たNGOが主催して開かれた。行ってどれに出ようかと思ったらアジアのものがひとつもない。
尾崎：そんなでしたか。
堀田：アジアは何をしているんだ、これは恥ずかしいというので、行った晩に樋口恵子さんと相談して、われわれでやろうと決めて、急遽、分科会に申し込んで、場所をとって時間をとっ

て、日本主催の分科会をやりました。「Let's share the experience of aging in Asia. アジアのエイジングの経験をシェアしよう！」という分科会の名称にして申し込み、わたしと樋口さんがプレゼンターになりました。もちろんわれわれは介護保険制度を誇りに思っているわけだから、どうやってどうできてと、ほぼ二年間の経緯を英文で書いて、樋口さんとそれぞれプレゼンをやった。参加者がどのくらい来るかと思ったら、一〇〇人くらい来てくれました。

尾崎：そうでしたか。

堀田：アジアの主要国はほとんど来てくれた。中国は来たし、台湾、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア・・。アジアの国々のエイジングに関係する役人もいたし、ＮＰＯもいたし、学者もいた。それが一〇〇人のうち六割で六〇人くらい。あとの四〇人がアメリカインディアンとか、アルメニアの女性とか、アフリカとか、中南米とか。要するに世界の少数派ですよね。世界の少数派が、アジアの日本がやるということで関心を持った。貧乏国の代表と思ったんじゃないですか。親近感を覚えたんでしょうね、来てくれました。

堀内：アジア・アフリカの代表として。

アジアは「介護保険制度」に関心を示さない

堀田：それでわれわれはプライドを持ちながら、介護保険制度をつくった苦労話をしたわけです。ところがだれも興味を示さない。

堀内：興味を示さないというのは、わからない？　自分たちの目指すものではない？
堀田：介護保険制度に関心を示さない。行政がやるそんなものはダメだということで。われわれが主体になってエイジングの幸せをつくりだす、そういう発言ばかり。次々に手をあげて、それぞれわが国のエイジングは、という話をする。中国までが政府ではなくわれわれがやるという。フィリピンもマレーシアもぜんぶそうですね。中国の女性がいったのですが、政府に望むことがあるとすれば、それは年寄りでも働けるような技術を教えることだといっていました。介護保険制度をつくって面倒をみるということについては質問がでない。アメリカインディアンからは、アメリカ政府はもっとやれという意見は出ました。国連といっしょです。金持ちはカネを出せ。アジアからはまったく出なかった。われわれは働いて自分たちでやるので介護保険制度などまったく考えていないという。樋口さんも同感だったけれど、恥ずかしくて。高齢者を働かせないでとくとくと介護保険制度の話をしたら、なんだ、あなたたちは依存症ではないか。
堀内：介護・医療とともにあるべき高齢者が働くことについての日本政府の認識がない。
堀田：アジアでやったらいいですよ。このままでは日本中が恥ずかしくなって、世界でやろうなんて大それたことは思わなくなります。もっと自分たちでやれ。
尾崎：そのようすは新聞の記事はどうだったんでしょう。
堀田：読売新聞は服部君と朝日新聞は編集委員だった川名さん。読売の服部君が一面をつかっ

て書いてくれた。溝田さんという方が分科会のようすを書いていますね。
堀内：樋口さんが毎日新聞に書いていました。
堀田：樋口さんは恥ずかしかったとは書いていないけれど、ぼくは恥ずかしかったですね。
堀内：おふたりとも英語でやられた。
堀田：樋口さんはわたしは英語は苦手よといって通訳がアシストしていました。
尾崎：日本に対する期待というのはなかったんですか。
堀田：アジアからはまったくといっていいほどありません。むしろイギリスとかアメリカとかヨーロッパの学者が日本の介護保険制度はドイツやオランダより進んでいるといって、何人かが聞きに来ていましたね。
堀内：先進国のそれぞれも学者には苦労がわかる。
堀田：そこではとくとくと、ドイツやオランダよりきめ細かくやっているという声があがりました。

国際会議で存在感のない日本

岡本：政府間の会合とNGOの会合とでは雰囲気が全然違うという感じだったようですか。
堀田：政府間の会合には顔も出していないけれど、おもしろいはずがないじゃないですか。三〇年前の一九八六年の「大綱」（長寿社会対策大綱）などは特に恥ずかしい。日本には「隠れ資

産」があるから高齢化には心配いらないという政府側の発言があります。高齢化に対応するための「隠れ資産」って何だと思います？　「家族介護」です。日本は家族がやるから大丈夫だといった。

尾崎：一九八二年の「ウイーン会議」の時には政府から閣僚が行っているのでしょうか。

堀田：その時はＮＰＯは行っていないから。ＮＰＯ会議自体がまだなかったころ。

岡本：日本には八二年ころにはそういう意識はなかった。

堀田：ないですね。

岡本：一九九九年の「国際高齢者年」あたりからそういう意識が。

尾崎：二〇〇二年にも閣僚は行っていないのですか。

堀田：国内事情の都合で行かなくなった。

岡本：日本は国際会議をおろそかにして国内事情を重視しますね。リオの「地球サミット」（環境と開発に関する国連会議、一九九二年）の時にも宮澤首相はいかなかった。

堀田：行ったって決められたことしか発言しない。

尾崎：日本でアジアの会議を開くとすれば、ＮＧＯ中心のほうがいいのでしょうか。

堀田：国連がやるなら形式的には政府間協議でしょう。国連会議をやればＮＧＯも合わせてやろうというしきたりができている。ほっといたって勝手にやりますよね。

尾崎：一九九四年の「世界人口開発会議」のときに、河野外務大臣に呼ばれて話をしたのです

けれど、そのときＮＧＯをどうするかで他の国は政府代表団にＮＧＯが入っていますよといったら、それでは入れようということになって。
堀田：政府会議そのものにはＮＧＯは出たがらない。そんなものに出たがるのはニセモノですよ。政府とはまったく別に活動する。
岡本：ＮＧＯはＮＧＯとして同じ時期に同じ場所で。
堀田：ＮＧＯでやって世界で共有してそれを市民にアピールしよう。
岡本：「地球サミット」のころの日本のＮＧＯは弱かったですね。
堀田：アジア全体のＮＧＯ意識が弱いんですね。二〇〇二年にも何十人か来ていることは来ていた。それぞれ発言したが、しっかりしていますよ。国の政策をとくとくと説明するような非ＮＧＯ的な団体なんかいない。会議を設けてプレゼンテーションしたのはわれわれなのに、いま思うと冷や汗が出る。
岡本：それがなかったら何もやらなかったことになる。
堀田：アジアの人たちとやろうというそこは良かったんですね。恥ずかしいのは日本の中身です。自分で飛び込んでやって冷や汗をかくんだから。
岡本：今度、堀田先生がやっておられる地域包括支援というような枠組みの活動は、アジア発で誇れるのではないですか。
堀田：どうでしょう。きちんとやれたらですね。やって当たり前のことですから。政府がやり

すぎて施設をつくって、みんなそこに入るようになったから、こんなことをやらなければならない。アジアなんて施設はたいしてないし、病院だってないから、自宅で死ぬのがふつう。あれが地域包括ケアです。

堀内：アジアには本来的にある姿ですね。

堀田：日本はやりすぎただけで、でっかいツラできない。アジアでは年寄りは死ぬまで働いているし、ぶらぶらしていない。これをいま日本でやりましょうといっている、これは実は遅れているのですよ。

岡本：それなのに高齢化最先進国とかいっている。

堀田：年寄りが多いのは最先進国ですけれども、やっている中身は遅れている。

堀内：高齢者先行国だけれども高齢社会先行国ではない。

堀田：だから年とってよくやるよねえと自分で思いながら、半分は恥ずかしい思いがしている。だから発起人はやりますよ。それやるのなら、国内でもっとしっかりやらないと。人集めて恥をかくことになる。

「新地域支援構想」を公表

堀内：昨年一〇月に尾崎さんとお訪ねしてここでお話をしたときに、医療・介護の法律の見直しにあたって、高齢者を社会参加させるために会をつくってやりますよとおっしゃっていまし

た。われわれは健康な高齢者の社会参加の姿が、どこまで法律の先に見えてくるのかと注目していたのですが、「新地域支援構想会議」による提案にも関わらず、結局は原老健局長がいっていた方向、「医療・介護一体化」という方向に動いたですね。消費税増税の直前ということもあって、厚労省内の分科会で細かく検討していて、そういう方向へ法改正が進んでいった。これは「支えられる高齢者」にとっては財政難の中では最良の見直しであることは確かなのでしょうが、それと同時に堀田先生がおっしゃる一〇〇〇万人レベルの元気な高齢者「支える側の高齢者」が法律を通してどう見えてくるかに期待していたのですが、一四団体の地域支援構想会議の力ではそこまでは・・。

堀田：いかないですね。

六・二〇記者会見

堀内：そのかわり六月一八日の「医療・介護推進法」の成立のすぐあと、六月二〇日に厚労省に提言を出して、記者会見をして「新地域支援構想」を発表しておられる。一般の高齢者が参加するよう呼びかけて、堀田先生は厚労省の職員といっしょに全国をまわっておられる。

堀田：高齢者が入っていっしょに支えましょうということで。

堀内：そのために高連協の代表である堀田先生が苦労をなさっている。わたしは五月一二日の「高連協」の総会にはオピニオン会員として参加しましたが、これが「高齢社会」形成への最

重要の課題として取り上げられて、堀田代表がやっている活動の説明があって組織をあげて支援し推進しようという決議が出るだろうと期待をもっていましたが、出ませんでした。最後のまとめで、堀田さんがやるべきことをやらないで広報委員会を充実して何を広報するのですか、とはっきり言われたわけですが。

堀田：あのときは激しく言ったのですがね。

堀内：内部事情があるのでしょうが、「さわやか福祉財団」をはじめ、全社協や日生協など一四団体が新地域支援構想会議に出ていますけれど、あそこに「高連協」が参加して支援活動をするようでないと、本来の高齢社会活動をリードする「高連協」ではないですね。

堀田：そうですね。

岡本：「さわやか福祉財団」の力は大きいですね。影響力は「高連協」よりはるかに大きい。

堀内：各地のインストラクターのみなさんが地元でよく動いておられる。

堀田：よくやってくれています。

堀内：いま堀田先生の活動なくしては自治体も動かないし、厚労省も説明に出てこない。

岡本：この間、福岡にいったら福岡でも先生が進めておられる「生活支援コーディネーター」の話が出ていました。さわやか福祉財団の方ががんばってやっておられます、と市の担当者がいっていました。全国でそういう活動が分かってきて、「生活支援コーディネーター」をいかに育てるか。

堀田：まさにいま必要です。
岡本：各地に知られればと思いますが。
堀田：それをなんとかしようと全国をまわっているのです。

「地域支援コーディネーター」の役割

堀内：地域にはそういう役割にふさわしい人がいます。その人たちが理解して動き出してくれれば周辺の高齢者が動き出す。
堀田：そうですね。やっぱり人です。どこにも人材はおります。その地域でそういう動きをつくっていこうという人たちが集まって、やる気の自治会長やＮＰＯでも協力してやる人、役人ＯＢにもいる。そういう人たちが勉強会を開いて、地域をどういうふうにつくっていくか。すでに各地でそういう動きが出てきています。しかしＮＰＯやボランティアにどっぷりはまっていた人と、樋口さんがいう自治会、地縁組織の「草の根封建おやじ」とはうまくいかない。ここはむずかしい。この両方を動かせる人でないとうまくいかない。コーディネーターにはなれない。でも、確実にそういう人はいるんです。
岡本：そういう人がコーディネーターになって中心になって・・
堀田：そういう方を中心に賛同者が広がれば地域はうまく動き出す。
岡本：地域によって違いますね。社会福祉協議会の人であったり自治会の人であったり。

堀田：そこにいる人材次第です。どこまで広い視野をもって動いているかですね。この間、海老名の先の秦野という市にいったのですが、講演会を主催してくれたのは地域の自治会でした。防災訓練が元になってつくった組織で、これは男たちが出てくるのです。どこに不自由な人がいるかがわかっているから、助け合いがやれる。それと東海大学があるので、大学生が参加して見守りなど町の手伝いをやる。大学の先生も来ていました。

堀内：秦野でできるということになれば、大都市圏の近郊の町なら同様に。

堀田：大都市のドーナツのところで。

堀内：元からの土地持ちもいるけれど、外から来た優れた人たちも多い。

堀田：そうです。

堀内：そういう点では範囲は広いですね。

堀田：広がってきますね。立川市の大山団地では自治会加入率を一〇〇%にした自治会長のおばさんがいます。女性は出てくるけれど、男を引き出さねば。男はおカネだということで、清掃とか剪定とか見守りとかの事業をプロより安いおカネで請け負って、男を引っ張り出してしごとをさせる。朝、剪定をして終わったらちょっとした小づかいをもらえる。これで孫のみやげが買えたりビールが呑めたりする。男が出るようになって、集会所に集まるようになって、あそこにこういう人がいるから助けようということになって。子どもが出てしまって一人暮らしが増えていますから、この人たちは認知症になったり亡くなってほったらかしにされるのが

こわい。そこをきちっとやりますということで市民後見人をたのむ。死んだあとの葬式は自治会と契約しておいて、亡くなったら自治会で面倒をみるというしくみができた。団地に新しく入ってくる人は歓迎会をやって、あなた一人になっても死んでも面倒みますよということで自治会が全員加入になった。これはおばさん一人一人の力です。

岡本：それはすごい人ですね。

堀田：人です。どうやって人を引っ張り出すか。秦野の例は男ですから食事とかは興味がない。防災ですね、これに男を引っ張り出して、これで助け合いにつなげる。副会長は女にして。

岡本：堀田先生のお話から、男性を引っ張り出すキーワードがいくつか出てきたですね。防災、小づかい、葬式、市民後見・・

堀内：それぞれ地域の特徴があるとしても、それをよく見抜いた人がいて・・

堀田：そこにあったことをやります。

堀内：外から来た人の、上から意識ではなくて。上からいくと地域の人はダメですね。

堀田：いっしょにやりましょうよ、でしょうね。でも男の会長はいばっていますね。だいたい上からものをいっていますね。それはそれで、おばさんがフォローしていますから。古い形の地元の人が会長のところは、自分から動きませんし、ダメですね。そういうところは有志があつまって地域協議会を別につくってやっています。いま自治会自身がやっているところと名前はいろいろありますけれど有志による協議会方式のところと。ここ一〇年ほどこちらがずっと

増えて半分くらいになりました。
岡本：そういう形だと動きますね。
堀田：動きます。結局、もとの自治会にとって替わるのですね。そのほうがいいところが多い。
堀内：先生のお話のポイントからすると、地域でいうと、大都市のど真ん中でもなく過疎になるようなところでもなくて、その中間の地域で成功することが多い。
堀田：超過疎は人がいないのだから、これはもう滅亡地域ですね。災害を受けた地域もきびしい。持続可能な地域のためにといってても乗ってこないところもある。自分たちの代で終わると考えている。それならそれで残ったもの同士のそういう助け合いもあるし、そういうしかけをつくっています。消滅する市や町が二〇四〇年に五〇〇余りあるという増田リスト、あれはあの通りです。もっと無くなります。増田さんは助成金を出してとかいっていますが、引き戻す手はないし、それはムリですよ。女性も東京へ出てきたからといって子どもを産むかというとそうでもない。
岡本：東京の出生率は低いです。
堀田：結婚しませんからね。東京だけが栄えるというのはウソですよ。そんなに子どもを産んでくれませんし。だから地方はダメ、東京もそんなには明るくはない。
尾崎：そうですか。
堀田：無くなるならそれはそれでなんとかしなければならない。これは移住しかない。近くの

人口五〇〇〇人くらいの町に、住民がばらばらの集落から移り住んでもらって。それで共同住宅のようなところに入ってもらって、小さな車で墓参りができるようにする。元のところに住まないので先祖に申し訳ないという思いもあるでしょうが、きちんと先祖の供養をしていればいいので、ムリしてそこに住んでいる必要はない。移り住んでもらって新しいコミュニティをつくって、そこでは車なしでも暮らせるようにする。周辺地域から集めて最後までそこで暮らしてもらう。ここを地域包括にする。これしかない。

岡本：先祖の墓にこだわる。

堀田：バスを出していっしょにまわればいい。被災地の場合も、新しい所にある程度まとまりますから医者も看護師も置くことができる。前のコミュニティをベースにしながらいくつか集めると、二〇〇メートル離してくれとか要求がでる。こっちの部落の人と別の部落からの人とを別にしてくれという。くっつけないで二〇〇メートル離してくれ。そうして地域包括が可能になる。あれしかないですね。

「地域包括支援センター」を中心にして

岡本：地域包括というと平均して中学校区で一万人くらいですか。

堀田：五〇〇〇人でもいけますよ。

堀内：生活圏ですよね。

堀田：はい。五〇〇〇人で十分にいけます。医者も二〇軒持てばなんとかやっていけるのです。片道三〇分以内に二〇軒。そこは何かあったら医者がかならず行く。看護師さんも行く。過疎のところはそうして集まってもらうと地域包括もやりやすい。コンビニをいれて、役所の申請から年金の受け取りから、全部やれるようにして。そして二階に認知症のグループホームを入れる。そうすると亭主が認知症になったら奥さんは上から下りてきて最後まで面倒がみられる。

堀内：二階が認知症。

堀田：それを言っているのです。国交省も賛成してくれて図面まで書いてくれているのですけれど、まだどこもやらない。

尾崎：増田さんがいっている中核都市とはどういう違いが。

岡本：あれはコンパクトシティの話です。富山市とか。いま堀田先生が言われているのは超過疎の地域をどうするか。

尾崎：移住によってまとめようという話。

堀田：過疎地対策ですね。あまり分散していると地域包括の助け合いに乗りづらい。

堀内：一方の東京のど真ん中はどうしたらいいですか。

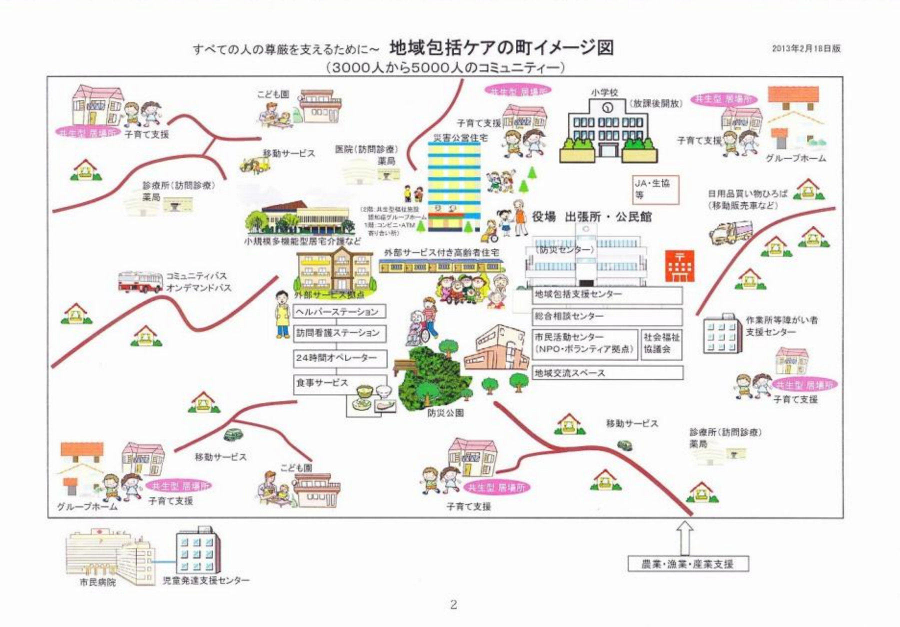
堀田：東京のど真ん中は、手に負えませんね。新しいコミュニティはむずかしい。冷え切ってあいさつもしないですから。山手線の内側では助け合いはむりですね。東京のど真ん中に住む人は自分のおカネで最後までやってくれ、頼めば医者もきてくれる。全部あなたのおカネでや

ればいい。はっきりいってそれしかないですね。温かい心のかよった暮らしをしたければ山手線の外へ出て、そこのコミュニティと混じって暮らしたらどうですか。自分の部屋へ入るのにカードを何回も差して、守衛がいて、あんなところでは助け合いは成り立たない。

岡本：コミュニティがない。

堀内：ウサギ小屋よりハチの巣のような住まい。

堀田：うちの財団の人が、港区に事務所があるのに、堀田さんは郊外から外ばかりしかけて地元の港区で何もできていないではないですか、財団として恥ずかしい。はじめのころにやったことはあるのです。グループホームをつくったり、居場所をつくったりした。居場所にしたって、地方へいったら五万円払えばできるのに、一五〇〇万円もかかる。人件費をかけて、そんなもの何になるんですか。港区でのしかけはやめました。



堀内：するとやっぱり仕掛けて有効なのはドーナツの地域ですね。都市機能はしかたなくあるわけですが、そこで生き死にするという問題は別であるということに。他とは条件が違いすぎますね。被災地のことですが、そうせざるをえない面もあって、まず地域包括支援センターを真ん中に据えて、周りで元の地域での関係を活かしながら生活をする、活動をする、事業をする。いろんな人が交流しながらセンターを囲んでいるというのは、実験的な面もふくめて納得がいきますね。

堀田：サービスセンターを中心にしてですね。

大震災被災地での経験から

岡本：すこし筋違いで申し訳ないのですが、被災地の地域包括の仕掛けがうまく機能するためにうかがいたいのですが。まず仮設住宅にはいった。そこですこしでもコミュニティらしく暮らして、その後に仮設住宅から本格的な住宅に移って、新しいコミュニティでうまく暮らすには、どんなやりかたがいいのかアドバイスをいただけると・・

堀田：中越地震がいちばんうまくいったんですね。阪神淡路のときは経験がなかったからばらばらに入れたんです。もと住んでいたところとは関係なしに仮設住宅に入れた。完全にコミュニティがこわれてしまって、なかなかつくれなくて。このときは浅野さんが宮城の知事で、かれが仮設のコミュニティをつくるためにということで、仮設住宅二棟を寄付してくれた。これ

で食事をいっしょにして毎日顔をあわせる。お互いに分担してしごとを持つ。浅野さんは集まれる場所を寄付した。これが阪神淡路のときのコミュニティのスタートです。さらに空き室を集まる場所にしたり、われわれはふれあいテントを持っていって活動しましたが、そういう空き場所で集まりながら仮設の絆がなんとか阪神淡路のときもできだした。そのコミュニティを活かしながら仮設から住宅に移るときにまとまって入った。これが阪神淡路のときですね。中越のときには、集落ごとに仮設に入った。初めからコミュニティは仮設でできていて、そのまま帰りましたから、いちばんスムーズにいった。東日本ではその経験があるから、集落ごとに仮設に入れましょうと政府もわれわれも言ったのですが、半分もそうできなかった。ばらばらに入れている。仮設がなかなかつくれなかった。もと海で平地になったところに住んでいてそれが全部流された。あとは山なので、削るようにして土地を開いているから仮設がまとめてつくれない。分かっていたんだけれど、おじいちゃん、おばあちゃん、病気の人から仮設に入れようというので、結局、そっちのほうが多くて。まとまって入ったところとは歴然とした差があります。でもなんとかコミュニティはできつつある。しかしこれを移すときにまとまって入れるものが建てられない。ここでまたばらばらになる。阪神淡路・中越の知恵がほとんど活かされていない。ただ東北の人たちは辛抱づよいし、つながるほうもなんとか絆ができています。最高の知恵が厚労省の次官だった辻さんが発案した向い合わせのケア付き住宅ですね。

岡本：大方潤一郎先生の。玄関が向あわせになっている。ドアをあけると顔を合わせる。

堀田：辻さんのチームが出した最高の知恵ですね。わたしもこれには負けたと思いました。阪神淡路のときはともかく中越のときになんで思いつかなかったのだろうと思った。こういうつくりをするだけでコミュニティが強くなります。知恵というのはすごいし、なかなか思いつかない。
岡本：みんなおなじ方向をむいてしまうから出入り口は向こうにあるから顔を合わせない。
堀田：素晴らしい知恵で、参ったと思いました。四月には図面を出してくれていましたので、五月に入って、これだこれだ、と各被災地へ勧めてまわったけれども採用しているのは、釜石と遠野だけですね。それも一部です。だから知恵は素晴らしいのだけれど、採用しないで古いやりかたを踏襲してしまう、この進歩性のなさも如実です。いま言うと、早く建てるところに頼んじゃって後悔していますなんて言っている。
岡本：ともかく早くつくらなければという。
堀田：ですからなかなか絆もむずかしい。いま地域通貨で復興応援をやって絆づくりをしています。釜石、南三陸町、大船渡、大槌、石巻、山元町。
堀内：それはそれぞれの地域ごとでしたね。
堀田：各地域それぞれです。大槌町では「ひょっこりひょうたん島」ですからドン・ガバチョ。五〇〇ガバチョとか二〇〇ガバチョ。
岡本：五〇〇ガバチョはいいですね。

堀田：通貨の裏にどんなことで助けられたにかを書いてそれを持っていって復興商店街で使える。そうすると経済振興にもなるし、寄付してくれた人は表に名前を書いているので、戻ってきたのを送っています。そうすると、どこで誰がなんのために使ったかがわかる。これは寄付のしがいがある。南三陸町では月に三〇〇〇枚はでています。

岡本：お願いにきたのに、きょうは逆に啓発されて。

「共助の文化」を推進する

堀田：講演では言っているのですけれど、助け合いの進め方ですが、そういう助け合いを二三年やってきて延びてはいるのですが、全国で要支援を引き受けますとか、障害者を引き受けますとか個別には限りがない、そこで「共助の文化」を推進すると宣言しています。

尾崎：「共助の文化」ですか。

堀田：定年を迎えて、人を助けることができる時間は十分にあるのに、自分のことばかりしているのが恥ずかしい、とみんなが思えるような文化をつくりたい。各地でそう申し上げております。文化でいまいちばん進んでいるのは学習文化。子どもらは学校へ行かないと恥ずかしい。学校が嫌いでもみんな行く。親がうるさいこともあるけれど、社会がそうさせる、そういう文化ができている。これがいちばん誇れるところです。働く文化では、これは日本は結婚したら女性は働かない。逆に北欧では働かないでいると白い目でみられる。昼間家にいると居心地が

悪い。
岡本：日本は男が無職というと恥ずかしい。女性は主婦というといいという雰囲気がある。堀田：これは男女共同参画なんていってもなかなか壊れない逆の文化をつくっちゃった。アメリカは女性が働く文化ですね。アメリカは男だけで外で飲むことをしない。うちのパーティでは必ず夫婦で呼ぶ。文化が成立しています。女性も働いています。日本の外交官の奥さんなら専業主婦ですが、アメリカでは働いている。働くことが当たり前で、誇りをもって語る。専業主婦だと、なぜいまわたしは専業主婦であるかの弁解をします。元最高裁判事が保険の勧誘員をやっている。健康のためだけではなく、公正な立場でアドバイスをして、ちょっぴり小づかいをもらう。
岡本：有償ボランティア。
堀田：保険会社も公正さを宣伝できるし保険のしくみをやさしく理解させるのは人助け。
堀内：楽しんでやっている。
堀田：ぶらぶらしていないことを誇りを持って話す。
堀内：日本のおじいちゃんおばあちゃんが教育に参加できていない。
堀田：塾があって子どもに隙間がない。子どもも疲れきっています。
岡本：日能検とか。
堀田：割り込む余地がない。

岡本：「共助の文化」ですね。

堀田：参加しないとさびしいという文化をつくりたい。

岡本：会社を辞めた後、ゴルフ三昧では恥ずかしいという文化。

堀田：ワークライフバランスはうまくいかなかったけれど、あれは内閣府と経団連と連合でしかけた。地域で定年退職者が能力をいかして何かやりましょうという運動を、内閣府からしかけて経団連と連合に協力してもらってやれるといい。内閣府は高連協の本源なのだし、やる気さえあれば動く。

岡本：むしろ高連協はそういう「共助の文化」をみんなでつくりましょうという運動をするのがいいですね。いろんな団体が参加しているのですから。

尾崎：いまお話されたワークライフバランスは失敗したといっていいんですか。

堀田：経営者がやりたくない。協力するふりをして、ワークライフバランスという名のもとに、サービス残業をやらせた。労働者のほうも帰ったことにして、帰らしてもらえない、ブラックの口実に使われた。悪いイメージがついてしまって、最近は言わなくなった。経営者がわるい。しっかり日本が「共助の文化」を深めて恥ずかしくないようにして、世界に呼びかける覚悟はいるでしょうね。高齢化会議をやるときまでにそういう日本にするという強い覚悟で。

岡本：最後におっしゃっていただいた「共助の文化」をつくろうというのは・・

堀内：共有しなければいけませんね。ベースです。ブラックのない善意。

岡本：同じように「共助」をやらないと恥ずかしい。毎日がゴルフでは恥ずかしい文化。

尾崎：夏を含めてお忙しいでしょうね。

堀田：この夏はしかたがない。「新地域支援事業」で全国を回ることになりますから。

堀内：やはり堀田さんがいかないという時期ですから。それがつらい。

尾崎：ありがとうございました。

（文責・堀内）